第１章 農力

古くから農業は登米地域の基幹産業。現在、農業の粗生産額は県内一を誇ります。地域を代表する作物「米」と、現代の食卓には欠かせない「牛肉」のブランド化を目指す「農力」を紹介します。

日々の努力が実を結ぶ

挑戦がブランド米を生む

群を抜く米の生産額と環境保全米の需用増加

北上川や迫川など、水量豊かな河川に支えられ、広大な耕土を擁する登米地域は、その地域特性を活かして魅力ある農産物を数多く生産してきました。

市の農業粗生産額（米、麦・雑穀豆類、果実、畜産など）は、２６８億７千万円と県内トップ（平成15年度現在）を誇り、そのうち、米の生産額が50％を占めています。

近年、農薬・化学肥料の使用を最小限に抑えて栽培された環境保全米の需要が高まってきています。このような消費者の声に応えるように、市内では環境保全型農業に取り組む農家が年々増加しています。

阿部　善文（よしふみ）さん（39歳）
南方町・板倉

環境保全米の先駆者 全国から注文が殺到

（有）板倉農産取締役の阿部善文さん（南方町）は、いち早く取り組んだ環境保全型農業の先駆者です。

現在、９・７㌶にひとめぼれやササニシキ、こころまちなど、８種類を作付けし、全国に２，３００件を超える顧客を抱えています。

阿部さんの農法は、稲わらや米ぬかなどを有機物として土に返し、微生物の繁殖環境を保つ独自のリサイクルシステムを活用します。

米ぬかに水と乳酸菌を加えて発酵、乾燥させ、小豆の大きさに加工した米ぬかペレットを田植えの時期に散布しています。水田の表面を有機物の層で覆い、トロトロにすることで初期の雑草を生えにくくしています。

また、アイガモを水田に放し飼いにし、農薬を使わずに除草する農法も取り入れています。この商品が板倉農産の独自ブランド、早稲種こころまちの「はつかり米」です。

全国各地から注文が殺到し、11月は出荷作業で大忙し。取材のときは、沖縄県に出荷する準備をしていました

渡り鳥を保護し共生できる農法

市には、伊豆沼や内沼があり、秋には多数のガンが飛来します。昔からガンは稲穂を食べる害鳥のイメー

丹精込めて作った環境保全米を一つ一つ大事に消費者のもとへ届けます

ジがありました。しかし、阿部さんは年々飛来数が減少している渡り鳥と共生できる農法を考えました。

「こころまちは早稲種なので、ガンが飛来する前にいち早く収穫できます。餌となる落ち穂や刈り取り後の切り株から生えてくる芽のヒコバエをガンに提供することで、ほかの水田への影響を少なくしています。ガンと共生したはつかり米を通して、伊豆沼などの登米市の豊かな自然を守っていることも、消費者にＰＲしていきたい」。阿部さんは農法に自信を持って語っています。

ブランド米を目指し全域での取り組みを

阿部さんは、消費者との交流も大切にしています。毎年県内外から多くの児童生徒などが、田植えや草取り、稲刈りなどの農業体験に訪れます。

また、担い手の確保や後進の指導のため、積極的に米作りの講師を引き受けたり、農業研修生を受け入れたりしています。自身のホームページに農作業の状況を紹介するなど、販売へのＰＲも欠かしません。

「環境保全米が登米市のブランド米となるよう、市内全域で取り組めればうれしい。同じ思いを抱いて取り組む人たちに情報提供をしていきたい」と語ります。

阿部さんの米作りへの挑戦はまだまだ続きます。